

県小研外国語教育研究会

Step by step.

全英連山形大会開催

県小研外国語教育研究会長 三好 義宏



全国英語教育研究団体連合会研究大会山形大会を、令和3年11月19・20日の両日に開催しました。本来は、山銀県民ホールのステージ上で、山形大学附属小学校6年生の実演授業を披露することが予定されておりました。しかし、コロナ感染症予防対策として開催方法が参集型ではないものになり、実演もVTR録画のズーム配信に切り替わりました。他にも、本県で外国語を先進的にすすめておられる3校の発表も入念な準備の上リモートで実施され、県内外の方から貴重なご意見を伺う、またとない機会となりました。

県外研では、県内の助言者・発表者・司会者・記録者は感染症対策を施した会場において参集型で行ったほか、サテライト会場も設置しました。発表にあたった4校の先生方が何度か交流し、同じ方向に向かって実践を積み重ね、本県の外国語教育の確かな一歩を踏み出すことができました。皆様のご協力により、大会を成功裏に進められましたこと、心より感謝申し上げます。

山形県の小学校外国語活動・外国語に求めること

文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子

新学習指導要領が全面実施となり2年が過ぎようとしています。コロナ感染症により、一斉休校や感染症拡大防止への対応により先生方はますます多忙となったことに加え、「言語活動」に制限等が加えられる中での全面実施初年度でした。また、対面による研修会の実施も困難となり、厳しい全面実施のスタートでした。しかしながら、学びを止めないという教育関係者の熱意のもと、リモートでの研修が行われるようになり、今年度開催された全国英語教育研究団体連合会研究大会山形大会は、2日間ともオンライン形式で開催され、多くの教育関係者がたくさんの学びを得ることができたことは幸いでした。そして、筆者は、ありがたいことに、本大会分科会に、山形県大江町立本郷東小学校 渋谷洋之教諭のご実践の指導助言者という立場で参加させていただき、山形県の実践に触れることができました。

そこで、本稿では、「山形県の小学校外国語活動・外国語に求めること」というタイトルの下、山形県の渋谷教諭のご実践を振り返りつつ、小学校外国語教育で大切にしたいことについて述べます。

渋谷教諭が実践で大切にされたことは、これまでの実践で、言語活動ではなく、言語材料について理解したり練習したりするための指導ばかり行っていたこと、単元の言語材料の指導という意識がぬけず、既習表現を活用し慣れ親しませる指導ができなかったという反省に立ち、「言語活動を通して」指導することです。このことは、次に示す通り、学習指導要領の外国語活動及び外国語の目標に記されています。小学校だけでなく、中等高等学校においても、児童生徒に「言語活動を通して」子供たちに求められる資質・能力を身に付けることが求められています。

中学年外国語活動目標:外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(下線筆者)

高学年外国語目標:外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(下線筆者)

また、言語活動とは、「『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』(2017年文部科学省)によると、「実際に英語を使用して自分の考えや気持ちを伝え合う活動を意味する」と記されており、言語材料について理解したり練習したりする指導とは区別されるものです。そして、言語活動を設定する際のポイントを学習指導要領やその解説から拾ってみると、「コミュニケーションを行う目的、場面、状況の明確な設定」「目的意識」「相手意識」「必然性」「コミュニケーションを図る楽しさ」「本当に伝えたい内容」などを挙げることができます。さらに、渋谷教諭は、学級担任としての深い子供理解を生かし、子供の伝えたい気持ちを高める「ほんもの」の課題を設定し、他教科等と関連付けた目的や場面、状況等の設定を行ったことで、子供たちが限られた言語材料を使いこなして、友達に伝えようと熱心に取り組む姿が見られたと報告をされています。

このように、1時間目から既習語句や表現、その単元で新しく出合った語句や表現等を繰り返し使って言語活動に取り組みせ、中間指導では発表内容等が目的や場面、状況に応じているかを確認したうえで困ったことをみんなで解決したり練習したりして、再度言語活動に取り組みせるといった「言語活動を通して」子供たちに求められる資質・能力を身に付けることが大切です。

授業実演及び分科会発表

「外国語を通じて、自ら関わりながら 相手や他者とつながろうとする子ども」 を育てるために

山形大学附属小学校 佐藤 大将

現学習指導要領が完全実施となった令和2年度、山形市37校の小学5・6年生を対象に、外国語の授業における意識調査を実施した。その結果を見ると、外国語を学ぶ必要性をなんとなく感じてはいるものの、外国語を使ってコミュニケーションを図る場面や状況を具体的に想像できていない子どもが多いという実態が明らかになった。そこで、子どもが外国語を通じて、クラスの仲間だけでなく、様々な国の人たちとつながる経験を積み重ねることで、コミュニケーションを図る喜びや難しさ、外国語を学ぶ必要性をより実感することができると考え、単元を構成した。

総合的な学習の時間の中で、山形市と連携しながら、オリンピックホストタウン相手国との交流を続けてきた6年生の子どもたちは、そのつながりをさらに広げるために、サモアの小学生とオンラインでつながり、日本や山形の魅力を伝えることにした。日本の学校生活や食文化、山形の観光地など、グループ毎に伝えたい内容を決め、調べ学習を行った。

相手がサモアの小学生であるため、コミュニケーションのツールとして英語が必要となる。そこで、外国語科の授業に必要な語彙や表現を学び、伝え方を考えていくことにした。本単元の学習を通して、子どもたちは、自分が伝えたいことを英語で表現する際、既習の語彙や表現が使えないか考えたり、一番伝えたいことは何か考え、シンプルに言い換えたりすればよいことを学んでいった。

サモアの小学生とのオンライン交流当日。花笠や和傘などの伝統工芸品について紹介した子どもたちは、既習の語彙や表現を使ったり、実際に花笠音頭を踊ったりしながら、精一杯山形の魅力を発信しようとしていた。この姿は、私たちが目指す「外国語を通じて、自ら関わりながら相手や他者とつながろうとする子ども」そのものであると感じた。

外国語教育における小・中・高の系統性を考えたときに、小学校では特に「つながろうとする気持ち」を育てたいと考えている。そのためには、子どもにとってコミュニケーションを図る必要感のある目的・場面・状況の設定や、問題解決を進める子どもへの働きかけについて、さらに研究していく必要があると感じている。子どもの思いや願いに寄り添いながら、今後も新たなチャレンジを続けていきたい。

分科会発表

子どもの「伝えたい」「知りたい」を 引き出す 仲間づくりの英語 ～指導と評価の一体化による授業改善を通して～

鶴岡市立朝陽第五小学校 本間 紘

外国語の学習では、コミュニケーション活動を通して他者理解・自己理解のある仲間づくりを大切にしたいと考えている。友だちと互いを理解し交友関係を広げ深めたりするとともに、友だちから触発され自分の関心のある世界が拡張されたりするコミュニケーション活動は、学級経営にもプラスに働くと考える。そのため、例えば人物紹介の単元では、友だちのよさをクイズにして紹介したり、道案内の単元では、架空の町ではなく実際の自分達の学区でおすすめの店や場所を紹介したりする活動を行うなどして、仲間づくりにつながるようにした。

また、指導と評価の一体化を目指した授業改善も行った。特に見えにくく、見取りにくい思考力・判断力・表現力が発揮された姿を「相手意識」という言葉で具体化し、より相手に伝わる表現を用いたり、相手が話したくなるような聞き方ができたりするようにした。具体的には、目指す会話のあり方を子どもと共にルーブリックを作成する試みである。ルーブリックは、言語活動の評価規準にもなり、その言語活動の内容がより豊かになるよう機能させた。その結果、目指すべき相手意識をもった話し方を協働しながら探究し、教師と子どもで共有することができた。ただし、特に低位の子には、ルーブリックの記載事項を実践することを意識しすぎず、楽しむことを第一にさせ、コミュニケーションの本質から外れないように使うことに留意したいと分科会の中で話題になった。

また、言語活動中は一人一人が話している様子の見取りが難しいことや、子どもと1対1で行うパフォーマンステストでは相手意識をもちにくく、言語活動でいきいきと話していた姿が再現されないことに以前から課題を感じていた。そこでタブレット端末を活用し、子ども同士のコミュニケーション活動の様子を個々に録画させるようにした。教師は後でその動画を見ながら、相手意識を発動させている様子を評価することができた。また子ども自身も動画を視聴し、上手かった点や改善点を確認し、振り返ることができた。

英語の習得はあくまで道具の獲得であり、それ自体が目的ではない。本当に「伝えたい」「知りたい」と思える言語活動を仕組み、前のめりになるようなコミュニケーション活動をしていくなかで、英語の力が身につくことを今後も目指していきたい。



分科会発表

よりよく伝え合うために、 考え、工夫する子どもの育成

～本物のコミュニケーションを生み出す言語活動を通して～

川西町立小松小学校 市川 道子、富水なつみ

私たちは、外国語を学校研究として、3年間取り組んできました。児童が英語を使って思いを伝え合うことを目標にしており、今年度は「よりよく伝え合うために、考え、工夫する子どもの育成～本物のコミュニケーションを生み出す言語活動を通して～」をテーマに設定しました。実践発表では、授業作りで最も大切に行っている、目的・場面・状況を明確にした言語活動の工夫について、今年度小松小学校で開催した公開授業研究会の授業を例に挙げながら発表しました。

発表後、東京家政大学の太田洋教授とのやり取りの中で、「児童がいかに自分の伝えたいと思うことを英語で表現できるか」「児童を支援していくためには、どのような指導が必要か」について深く考える機会を得ました。研究を始めた頃は、児童に発話をさせたいと思うあまりに、学んでほしい表現にばかり目がいてしまっていました。そのため、機械的なインプットになってしまい、結果的には教師が望んでいたのとは全く逆で、自信をもてずに萎縮した姿の児童が多かったのです。指導者としてまず考えるべきは、児童が「話したい、聞きたい」と強い意欲をもつことができる言語活動であるかということ、そして何より目の前の子供たちにとって、目的や場面・状況が合っているかについてよく検討するべきであることなのだ、改めて理解することができました。太田先生とのお話の中で、3年間取り組んできた「道案内」を例に挙げ、授業における言語活動がどのように変容してきたかを具体的にご紹介することができたことで、参会の先生方にもわかりやすくお伝えできたと思います。

また、今まで学び積み上げてきた既習表現を児童からどのように引き出すかについては、児童達が協働的に話し合い、試行錯誤しながら活動を繰り返していく中で、スムーズにいかない状態が当たり前となり、毎回話すたびにもっとよくしていこうという意識をもつことができたことも話題にさせていただきました。児童に自ら気付く機会を与えることや、時には全体で考えたり共有したりしてきたこれまでの学びをご紹介することができました。

自分たちの研究を振り返り、太田先生を始め、参会の多くの先生方と成果を共有する機会をいただいたことに、心から感謝申し上げます。

分科会発表

『ほんもの』のコミュニケーションを促す 課題を通して学び、スモールトークで 既習表現を繰り返し活用し定着を図る授業改善

大江町立本郷東小学校 渋谷 洋之

英語の授業を通して児童には「英語で相手に自分の気持ちや考えが伝わる喜び」を感じてほしいと考えています。

そこで、日々の授業を構成するにあたり、「『ほんもの』の課題を通して学ぶこと」と「繰り返し活用すること」を重要視し、この2つが「学習に対する意欲の高まり」と「確かな英語力の向上」につながる両輪となるように工夫しています。

『ほんもの』の課題を通して学ぶためには、児童が「やってみたい」とコミュニケーションを行う意欲をかき立てられるような目的や場面、状況などを設定した言語活動をすることが大切です。これまでの実践として、新しく赴任した校長先生に英語で自己紹介したり、授業参観で保護者に感謝の思いを英語で伝えたりしてきました。この実践の中で、児童は英語を楽しく学び、自分の成長を実感したいと感じているのだと気付きました。私たち教師は、その思いに寄り添うために「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じた言語活動を企画し続けることが求められます。また、児童にとって『ほんもの』の課題でも、思い切り表現することをためらうようでは、伝わる喜びを味わうことはできません。そこで、児童が自信をもって自らの考えや気持ちを発信できるように、既習表現を定着させる必要があります。そのために、スモールトークを重ねながら、繰り返し既習表現を活用していきました。スモールトークの実践を2年間継続したところ、児童の発話量は大きく増加しました。また、自分の英語で、考えや気持ちを伝えられたとき、自らの成長を実感し英語を学ぶ意欲がさらに高まる姿が見られました。

私は、英語で自分の考えや気持ちが相手に伝わる喜びを味わえる授業を行うために、「『ほんもの』の課題」と「既習表現を活用できる力を高める実践」についての研究を同時に進めていくことが必要だと考えます。直山視学官の言葉を借りれば、「教育とは児童が変わること」。前向きな変化を望む児童に寄り添った実践を、これからも追求します。



第71回 全英連山形大会

山形県で初開催となる全英連山形大会は、「Explore! 未来を切り拓く英語教育の推進～自ら学び仲間と高め合う授業の創造～」を大会テーマに、11月19、20日の両日にわたり開催されました。コロナ禍で、これまでと全く異なる開催形式となりましたが、全国から500名を超える方々にご参加いただき充実した大会になりました。小学校部では、今回の会報誌で紙面報告していただいた5名の先生方による授業実演と4つの研究分科会を行いました。「外国語と他教科を関連付けた学級カリキュラム」「子どもと共に作成するルーブリック」「児童の思いを大事にした言語活動」「スモールトークによる継続的な実践」など、それぞれのテーマについて具体的な児童の変容をもとに発表が行われ、参加者との活発な意見交換が見られる充実した分科会となりました。

※本大会は、第2回県外研 研究協議会を兼ねた。

(文責：山形大学附属小学校 横 正智)

第3回 県外研 研究協議会(長井市)

第3回県外研研究協議会を、長井市立平野小学校を会場に、令和4年11月25日(金)に開催いたします。この大会は、西置賜地区現職教育協議会小学校英語専門部会の研修会も兼ねて行います。

平野小学校は、令和4年度より長井市学校教育研修所から英語教育研究推進校の指定を受け、3年間の研究に取り組むこととなりました。研究テーマを「よりよく伝え合うために、考え、工夫し、実践する子どもの育成」とし、研究の視点として「明確な目的・場面・状況設定のある指導の工夫」と「相手意識をもった豊かなコミュニケーションづくり」の2つを設定して研究を推進して参ります。

また、長井市は各小学校に1名ずつALTが常駐しており、とても恵まれた環境の中で外国語の授業が行われています。今年度から、市内の全ALTが各学校に集まり、多くのALTと関わる授業「AL Talk Day」が行われることになりました。研究協議会では、長井市の特色ある取組の一環として、その様子も公開できればと思っております。

研究初年度の実践ですので、課題も多く見られると思われます。多くの方にご参加いただき、ご教示いただければ幸いです。

(文責 長井市立平野小学校長 菊地 一栄)

» 令和3年度 山形県外国語教育研究会役員名簿

会 長	三好 義宏 (山形市立第五小学校)			
副 会 長	菊地 一栄 (長井市立平野小学校)		齊藤 厚志 (天童市立長岡小学校)	
地 区 理 事	山 形	三好 義宏 (山形市立第五小学校)	米 沢	菊地 泰志 (米沢市立愛宕小学校)
	上 山	石原 敏行 (上市市立西郷第一小学校)	東置賜	竹田 啓 (川西町立小松小学校)
	東村山	齊藤 厚志 (天童市立長岡小学校)	西置賜	菊地 一栄 (長井市立平野小学校)
	西村山	阿部 仁志 (寒河江市立三泉小学校)	田 川	渋谷 譲 (三川町立横山小学校)
	北村山	佐藤 義紀 (村山市立富並小学校)	飽 海	菊池 裕史 (酒田市立西荒瀬小学校)
	最 上	伊藤 道子 (真室川町立真室川あさひ小学校)		
顧 問	畠中 雄紀 (山形県教育センター)			
監 事	石原 敏行 (上市市立西郷第一小学校)		渋谷 譲 (三川町立横山小学校)	
幹 事	横 正智 (山形大学附属小学校)		海谷 真記 (山形市立楯山小学校)	
	新田垂紗恵 (山形市立村木沢小学校)			